



# ティーチングポートフォリオ

佐賀大学農学部

准教授 辻 一成

作成日：2010年3月1日—2010年3月3日



ティーチングポートフォリオ

教員氏名：辻 一成

所属学科／学部：生物環境科学科／農学部

大学名：佐賀大学

作成日：2010年3月1日 - 3日

## 目次

### I. 教育の責任

### II. 教育理念, 方法, 戦略

- 1) 講義資料は、学生の自学用として負担が少なく、興味をそそるものを準備する
- 2) 学生の疑問や質問、意見の表明に対して適時適切に応答する
- 3) 専門分野の基礎力を身につけさせるために反復練習の機会を与える
- 4) 重要と考える情報を自らの責任において取捨選択させる場を与える
- 5) 健全な競争意識の醸成を図り、同時に協働の効果・重要性を意識させる
- 6) 実社会との関連性を維持するためにフィールドワークを重視する

### III. 学生の努力に対する多面的評価の方法

### IV. 指導に対する学生と同僚の評価

- 1) 学生の評価
- 2) 同僚の評価

### V. 今後の教育目標

- 1) 短期的な目標
  - ① FD 活動への参加
  - ② 学生の授業評価の高い教員、同じ専門分野の教員とのディスカッション
  - ③ 専門分野における研究水準の維持
- 2) 長期的な目標

### VI. 添付資料一覧

### I. 教育の責任

私は、農学部生物環境科学科地域資源開発学コースの教員として、学部のレベルの講義と演習、及び卒業研究指導を中心に担当し、併せて大学院修士課程レベルでは平成 21 年度から開講している「農業技術経営管理士」育成プログラムの実施コーディネーター（正規課程の修士学生と社会人向け特別の課程を含む）を担当している。

以下に学部レベルについて、私が担当してきた授業科目とそのカリキュラムの中での位置づけを表に示す。なお、これらの授業科目については、本学で定められた形式に沿って作成したシラバスを Web 上に公開している（添付資料 A）。

授業科目名	対象	必/選	カリキュラムにおける位置づけ	受講者数
大学入門科目 (分担)	学部 1 前期	学部 必修	教養教育科目；高大接続目的の科目	10 人 (2009 年)
地域社会開発学概説 (分担)	学部 1 後期	学科 必須	専門科目；農学及び生物環境科学の基礎を体系的に理解させる科目	63～74 人 (2007-09 年)
地域ビジネス開発論 (分担)	学部 2 前期	コース 必修	専門科目；地域ビジネス開発学とその関連領域における専門知識と科学的方法を習得させる科目	22～35 人 (2007-09 年)
フィールドワーク基礎演習 (分担)	学部 2 前期・ 集中	コース 必修	専門科目；地域社会開発学を学習する上で必要な幅広い知識を習得させる科目	15～17 人 (2008-09 年)
経営資源管理学	学部 2 後期	選択	専門科目；地域ビジネス開発学とその関連領域における専門知識と科学的方法を習得させる科目	24～32 人 (2007-09 年)
科学英語 (分担)	学部 3 後期	学部 必修	専門科目；外国語によって、様々なメディア及びフィールドワークを通して必要な情報を収集、取捨選択できる能力を強化する科目	15～17 人 (2008-09 年)
農業会計学	学部 3 前期	選択	専門科目；地域ビジネス開発学とその関連領域における専門知識と科学的方法を習得させる科目	18～22 人 (2008-09 年)
社会統計学	学部 3 前期	選択	専門科目；地域社会開発学を学習する上で必要な幅広い知識を習得させる科目	22～32 人 (2008-09 年)
アジアフィールドワーク (分担)	学部 3 前期・ 集中	選択	専門科目；地域社会開発学を学習する上で必要な幅広い知識を習得させる科目／外国語（英語等）によるコミュニケーション能力を開発し、強化する科目	8 人 (2008 年)
アジア比較農業論 (分担)	学部 3 後期	選択	専門科目；地域ビジネス開発学とその関連領域における専門知識と科学的方法を習得させる科目	9～12 人 (2007-09 年)
地域ビジネス開発学演習 I	学部 3 後期	選択	専門科目；地域ビジネス開発学とその関連領域における専門知識と科学的方法を習得させる科目／様々なメディア及びフィールドワークを通して必要な情報を収集、取捨選択できる能力を強化する科目	6～7 人 (2007-09 年)
インターンシップ I (分担) インターンシップ II (分担)	学部 3 前期	選択	専門科目；収集した情報を用いて、自ら仕事や研究の計画を立て、効率的に実行し、結果をとりまとめ、その成果について客観的な自己評価ができる能力を開発し、強化する科目	1～3 人 (2007-09 年)
卒業研究	学 部 4・通年	必須	専門科目；日本語による論理的記述やプレゼンテーション能力、及び外国語（英語等）によるコミュニケーション能力を開発し、強化する科目／収集した情報を用いて、自ら仕事や研究の計画を立て、効率的に実行し、結果をとりまとめ、その成果について客観的な自己評価ができる能力を開発し、強化する科目	5～7 人 (2007-09 年)

なお、以上の一覧のうち、大学入門科目と地域社会開発学概説以外は、農学部生物環境科学科地域社会開発学コースのカリキュラムに関係する授業科目である。この他にも学部レベルでは、教養教育科目（第7分野）「佐賀の農業を考える」（2004, 2006, 2008 前期, 受講者数 10 人程度）を隔年で担当し、教員免状取得の教職に関する科目の「総合演習」（2008 前期, 受講者数 10 人）を担当した。

また、大学院修士課程及び特別の課程の「農業技術経営管理士」育成プログラムに関しては、授業カリキュラムの編成素案の作成、ケースメソッドを取り入れた実践的教育手法の研究と導入のための条件整備、ケース教材の開発と編集の一端を担当しており、平成 22 年度からの本格実施に向けて準備中である（添付資料 B）。さらに、これら正規の授業以外にも、1 年間の短期留学生向けの英語による授業科目（本学留学生センターの）”Japanese Agriculture in Today (2006-2008 年, 受講者数 3-7 人)”と ”Personal Study (2008 年通年, 受講者数 1 人)”を担当した。

私は、上記の授業担当者としての責任以外に、2009年10月に学長補佐に任命されて以降、教育・学生生活担当理事室の一員として、主に学生の生活支援に関する全学的業務に従事している。本学の学生が、安心して勉学に励み、より質の高い学生生活を送ることができるよう、大学として支援環境の改善と充実に向けた企画を行い、実施に移していくことが務めである。

## II. 教育理念, 方法, 戦略

私の本学教員としての役割は、「佐賀大学憲章」(<http://www.saga-u.ac.jp/saga-u/kensyou.html>) の下で、農学部生物環境科学科地域社会開発学コースの開講意図に沿って、学生が農業と農村開発に関する技術的・社会経済的諸問題を多角的かつ構造的に捉えられるようになることを助け、また具体的問題解決に向けて専門領域から接近することにどのような意義があり、同時にどのような限界があるのかを知覚させることにあると考えている。このことが、学生にとってその後の研究の広がりや学習意欲の持続的向上、さらに問題解決に向けた他者との協働の必要性への気づきになると考える。多くの学生はそうした能力を磨き、4 年後には一人の社会人として大学を巣立っていくことになる。それに向けた訓練を積みあげていく過程において、私が教員として存在することの意味と責任を十分に認識しているつもりである。したがって、個々の学生が、私との接触を通じて、信頼感の中で疑問解決や意見表明することの喜びを感じることを、そしてそのことが単なる個人的な満足にとどまらず、自分の行為が周囲の他者にとっても有益であり、社会に一定の貢献をしているという実感を持たせられることを強く意識して教育活動にあたっている。その際、私が特に重要と考えているのは、学生に何をどのように学習するのかを能動的に学んでほしいということである。そのために学生は、自分の考えや質問を言葉にし、また自分が学んでいることをできるだけ正確に伝えるコミュニケーション能力を養うことが必要である。そのために動機づけと適切な刺激を与えつづけることが必要であり、この点について私は以下の 6 つの戦略（手法）が有効であると考えている。

### 1) 講義資料は、自学用として負担が少なく、学生の興味をそそるものを準備する

講義で配布する資料は、授業での説明の補助となるものだが、同時に学生が自学する際に興味をもって再読したいと思わせるものでないといけない。特に低学年次の学生には、講義後に復習したり整理したりする際に、読む負担をあまり感じさせない講義資料（レジュメ）を準備・提示することが重要である。そこで私は、一部の授業では、液晶プロジェクターで表示するのは違い、重要事項を空欄にした穴埋め式の資料を作成し配布している（添付資料 C）。これを利用することで、学生は授業内容のポイントを絞り込むことができる。また学生への配布資料には、授業内容に密接に関連する直近の新聞記事や雑誌記事等を極力盛り込むことにしている。これは当該授業が単に形式的な知識の習得を目的としているのではなく、現実社会における問題を考えるための学問であることを意識づける狙いがある。

### 2) 学生の疑問や質問、意見の表明に対して適時適切に応答する

学習の方法を学び始め、コミュニケーション力の重要性を認識し始めたばかりの学生に対して適切に対応することは重要である。講義や自習の過程で学生がもつ疑問や意見は、いかにその表現が不明瞭、不適切であっても、彼らの学習意欲の発現であることに違いないから、その真意を汲み取るよう配慮し、適時適切にレスポンスすることが重要である。そのために私は講義室の内外で近づきやすい存在でなければならぬし、講義中に教員との接触に負担を感じる学生には特に配慮して、できるだけ多様な接触の場や環境を提供することにしている。一つは、学生に毎回の授業後に感想や意見（A6 用紙 / 1 枚）を書かせ（添付資料 D）、その要点をとりまとめ、次回授業の導入部で模範的なものとそうでないものを受講生全員に提示してコメントすることである（添付資料 E）。この際には適時適切な応答と同時に、学生には問題提起（あるいは意見表明）とその根拠の提示の重要性を強調することが大事である。このことは、上級学年になった後にさらに要求される仮説と実証の手続き（科学的態度）を身につけさせるためのきっかけにもなる。

### 3) 専門分野の基礎力を身につけさせるために反復練習の機会を与える

専門知識と科学的方法の習得には、最低の共通語となる専門用語やその概念を理解し、統計学など基礎的手法を身につけさせなければならない。これについては反復練習によることが効果的であるため、毎授業で復習問題を課すことにしている。その解答解説は授業中に行う場合もあるが、基本的に教員研究室前の掲示版に貼りだし、学生自身に答え合わせをさせている（添付資料 F）。これには、衆人の中で授業中に発言したり質問したりすることが苦手な学生であっても、個別に教員と接する機会が増えるメリットがある。また、教員は掲示版を確認に来た学生にはできるだけ声を掛け、学生の顔ぶれを確認することで個々の授業への興味の程度を把握することができる。

### 4) 重要と考える情報を自らの責任において取捨選択させる場を与える

私は、一部の授業科目において、中間試験や期末試験実施の際に A4 用紙（1 枚）に授業内容について各自が自筆でまとめた資料の持ち込みを許可することになっている（添付資料 G）。これによって学生は自分の授業内容の理解度を把握し、答案を作成するために必要な情報を自分の責任において取捨選択し、要領よくとりまとめる訓練をすることになる。

## 5) 健全な競争意識の醸成を図り、同時に協働の効果・重要性を意識させる

特に演習科目と卒業研究の指導では、学生の発表と相互の議論を活発にさせることに重点をおく。当初は指導教員である私のコメントに対する各学生の応答が中心になるが、回数を重ねるごとに学生同士によるコメントと質疑応答がメインとなるような雰囲気づくりをしていく。この方法は内容や研究の完成度の水準を一時的に低下させるよう見えるが、学生間の健全な競争意識の醸成が図られると同時に、相互の信頼にもとづく協力関係が全体の水準を引き上げることにつながり、学生同士の発言の自由度を高め、結果的に予想を上回る成果を上げることが可能になる。この点に関して、例えば教育コースの卒業論文発表会（2010年2月16日実施、発表者17人）では教員7人による審査の結果、私を中心となって指導した学生3人のうち1人が準優秀賞、残り2名がそれぞれ3位と5位に選ばれた（添付資料H）。

## 6) 実社会との関連性の維持するためにフィールドワークを重視する

本来、農学は、自然科学の成果を駆使して有限の資源を用いて効率的に生産力化し、そこに社会科学や人文科学の知見を総合することで食料生産の主体である農業経営や農村社会を持続的発展へと導く応用の学である。しかし、農学における専門領域の分化がすすむ今日、再度、学際的領域に生じる農業をめぐる問題解決のために当事者（農業者、普及員、研究者など）を組織し、それらの協力的貢献を引き出しつつ、一定の与件下で選択可能な解決法や新しい技術開発を行い、その適用成果を評価して汎用技術にしていくことの必要性が高くなっている。そうした研究（技術）と現場（経済）をつなぐ研究と実践を行うことが私の専門分野（農業経営学）の使命である。したがって、この研究分野に関心をもつ学生は、自然科学的知識と農業・農村現場の両方に一定の理解と知見をもつことが求められる。フィールドワークの重視は、そうした学生の勉学に対する高いモチベーションを維持するために不可欠であり、講義内容と実生活のつながりを学生に常に意識させる重要な戦略である。

## Ⅲ. 学生の努力に対する多面的評価の方法

以上までに記述したことから明らかなように、私の授業では学生の負担は必ずしも小さくないと思われる。また、多様な学生がいる中で、試験の結果にもとづく一律の評価基準を用いるだけでは彼らの勉学意欲を維持し努力させることには必ずしもつながらない場合がある。そこで、私は複数の評価軸を設定し、学生の努力の程度と（他の学生にも良い影響を及ぼす）授業への貢献度を考慮して多面的に学生を評価する必要性を感じている。実際の成績評価では、むろんどの学生にとってもより公平で客観的な試験の評点が基本になるが（60～70%）、出席状況（20%）、講義の中で出した課題への取り組みのうち授業内容の深化のきっかけとなるものも評価対象とし（10～20%）、さらに授業中の積極的発言には特別に加点することになっている。

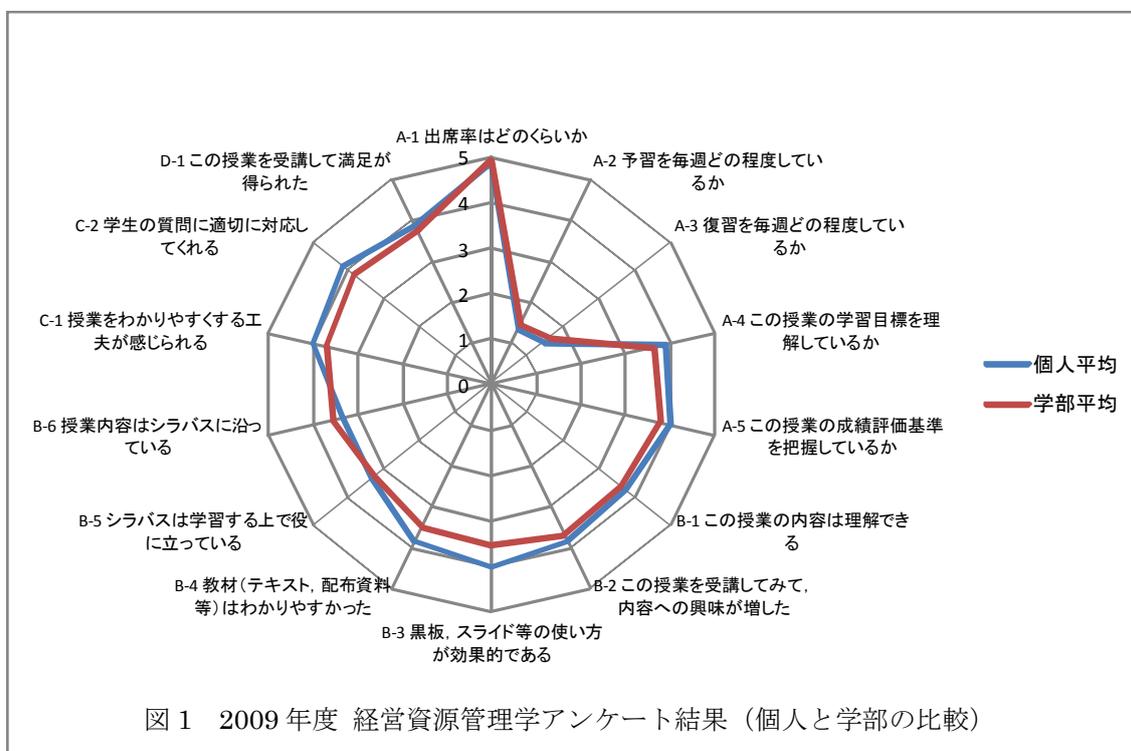
また、明らかに努力の跡が伺えるにも拘わらず、惜しくも及第点に至らない学生には、試験の修正をさせ（追試験のこともある）、いわゆる救済措置としての加点を施すことがある。こうした評価方法を採用するのは、授業内容を十分に理解しないままに落第し、興味と関心を失ってしまうことより、学生に復習を再度奨励しその努力をさせることの方が、教育的成果の観点からも意義があると考えからである。

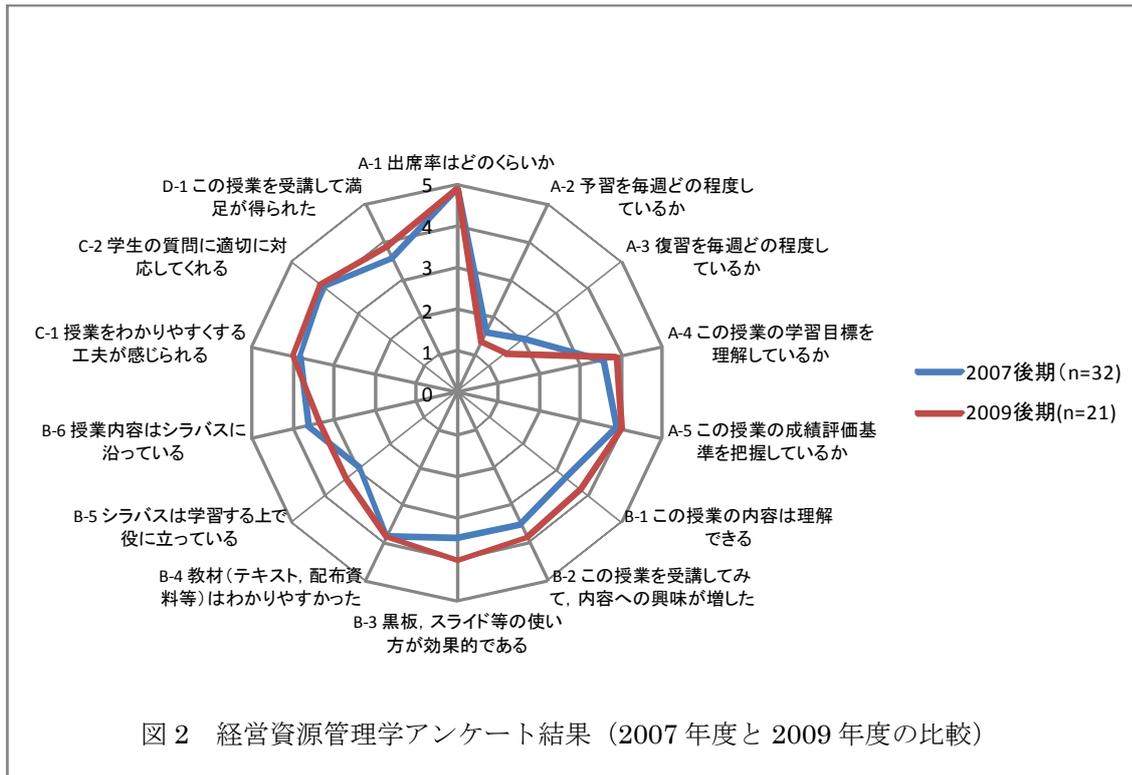
#### IV. 指導に対する学生と同僚の評価

##### 1) 学生の評価

図1は、2009年度後学期に私が担当した授業科目「経営資源管理学」に対する学生による授業評価の結果を学部全体の平均と比較したものである。チャートの形状は互いに類似しているが、出席 (A-1)、わかりやすさ (C-1)、質問に対する応答 (C-2) など、「教育理念、方法、戦略」の項で私が特に意識していることを強調した項目で、学部平均より高い評価を得ていることは、それらに対する学生の満足度が大きいことを証明している。「授業内容はシラバスに沿っている (B-6)」の項目が学部平均より低い評価となったが、これは先にも指摘したとおり、当初のシラバスにない時事問題についての内容を急きょ授業に取り入れることや、本学で採用している全学共通のシラバス形式がそもそも学生のニーズにあまり合っていないことに原因の一端があるように思われる。いずれにしても、今後個人として改善を図る必要がある点であろう。なお、図示は省略したが、2007年に開講した当該科目に対する学生による評価では、多くの項目で学部平均を若干下回っていた。したがって、2009年度の授業評価の結果は、この間に改善の効果が上がったものと判断できる。その点は、当該授業に関する2007年度と2009年度の学生評価を比較した図2によっても推察できる。

また、毎授業で学生に提出させる授業内容への質問や意見では、質問に対する丁寧なコメントと解説を評価する記述が1~2人の学生から寄せられている。さらに別の意見ではパワーポイントスライドの文字の大きさや色使いについて改善を求められたこともある。そのような指摘を受け入れて改善を行ってきた成果であることも特筆しておきたい。





## 2) 同僚の評価

本学では教員相互に授業を公開し、自由な授業参観を奨励する期間が設けられているが、これまで私の授業に参観があった例はない。しかし、私が担当する講義について学部長からコメントをもらった経験がある。内容は、市場経済下の個別経済の二重性を説明する上で、マックスウェーバーについて触れた個所であった。社会科学の分野で古典を引用することはごく普通のことだが、自然科学(熱帯作物学)が専門の学部長には印象的であったらしく、「学生の学びの姿勢に広がりをもたせるきっかけになる」とのコメントをもらった。経験豊富な教員から肯定的な評価を得たことは収穫であった。

また、先に学生の卒業研究の成果について言及したが、発表終了後に私が指導した学生に対してなされた「極めて現在的な課題に取り組み、先行研究レビュー、仮説設定、実証方法、データ収集と分析、考察と結論等と内容が、例年になく高い水準に到達していた。」(農学部生物環境科学科 I 准教授, 人文地理学)、「海外研究に積極的に取り組み、英語でのインタビューによる資料収集を行うなど、高い研究意欲が感じられる。質疑応答の態度とその内容の水準も評価でき、3年次の分野配属後2年間の成長が著しかった。」(農学部生物環境科学科 F 准教授, 環境社会学)などの感想は、直接にはむしろ当該学生の努力とその成果に向けられたものであるが、私の指導方針や方法が間接的に評価されたものとして自信を得られるものとなった。

## V. 今後の教育目標

### 1) 短期的な目標

いっそうの指導力向上に向けて、今後特に意識して行っていくつもりである短期的目標は次の3点である。

### ① FD 活動への参加

学内で開催される FD 活動やワークショップのすべてに参加できるわけではないが、その中でも高大連携・接続に関わる内容と学生心理や健康生活に関する内容の FD には努めて参加するようにしている（添付資料 I）。高等学校における教育課程の変更により新入学生の基礎学力の低下が教員間で議論されることが増えているが、その多くは感覚的、感情的な域を出ず、対策を伴わないものがほとんどである。それに対して高校教員の生の声を聞くことを通じて得られる情報を踏まえて学生を観察し、その結果にもとづいて効果的な授業方法を構想するなどの建設的な対応ができることは収穫である。また、学生の修学意欲に影響するのは基礎学力の低下だけではない。学生の社会生活や経済生活を取り巻く環境悪化が当人の心理に及ぼす影響、ひいてはそのことが修学態度に及ぼしている影響を見極め、個々の学生の状況を多面的に見る態度を常に意識しておきたい。

### ② 学生の授業評価の高い教員、同じ専門分野の教員とのディスカッション

私の教育理念、方法、戦略が、現在のところ曲がりなりにも一定の評価を受けるようになった背景には、赴任直後に教務委員を務めることになった私に、委員会や個人的な付き合いの場で、大学教員としての自身の教育理念や方法について時間を割いて話をして頂いた近藤栄造名誉教授の存在がある。近藤教授から受けた影響や刺激を個人的な体験としてとどめるのではなく、さらに社会化する必要を感じている。そこで、この点について、まずは同年代教員間で相互の経験を共有するための時間を増やすことである（添付資料 J）。さらに同じ専門分野の他大学の先輩教員（所属学会の副会長）とも、教育に関する意見交換を行っている。不定期であるが、これも継続していきたい。

### ③ 専門分野における研究水準の維持と国際交流の推進

専門分野における質の高い教育は、質の高い研究（学会で認められる研究）を抜きにしてはその水準を維持できない。幸いなことに、この 10 年間ほぼ途切れることなく、ベトナム農業に関する一連の研究テーマで科学研究費を取得してきた。このことは、ベトナムを対象とした国内の農業経済研究に関しては、一応フォアランナーの一人であると認められているものとする。この強みを教育活動に反映させるために、ベトナム及びその周辺国からの留学生をできるだけ数多く引き受ける環境整備にも力を入れていきたい。

## 2) 長期的な目標

- ① 本ティーチングポートフォリオの作成を通じてこれまでの教育活動を真摯に振り返ったことが、引き続き教育活動内容の充実反映されるようにしたい。またティーチングポートフォリオを常に最新の状況にあわせて改訂することを習慣づけたい。
- ② 講義資料は、常に学生の理解度を確かめつつ、最新の情報を盛り込んだものに改訂していくことを続けたい。そのために学生のできるだけ生の声を多く聞けるようにする機会と方策を練ることに工夫を凝らしたい。
- ③ 私の作成したティーチングポートフォリオが、日本人学生だけでなく、留学生教育においても通用するものであることを、実際の教育活動を通じて証明していきたい。佐賀大

学においても留学生は今後ますます増加することになる。しかし、本学において留学生教育の組織的な授業改善は、日本人学生を対象としたもの以上に改善を要する課題が多い。そうした課題の改善に向けて、先導的な本学教員の一人になることを心がけたい。

## VI. 添付資料一覧

- 添付資料 A： 担当授業シラバス（本人が作成を担当している分のみ）
- 添付資料 B： 大学院 GP 農業版 MOT（副コース／特別の課程）のカリキュラム
- 添付資料 C： 講義レジュメ（学生配布用）の例
- 添付資料 D： 学生の授業へのコメント（意見・質問）の例
- 添付資料 E： 学生の意見・質問に対する応答の例
- 添付資料 F： 研究室前掲示板に張り出す模範解答・解説を参照する学生（写真）
- 添付資料 G： 学生が期末試験受験時にまとめた持ち込み資料の例
- 添付資料 H： 平成 21 年度卒業論文発表会成績順位表
- 添付資料 I： 平成 21 年度に参加した FD 活動での配布資料
- 添付資料 J： 同年代教員と教育活動に関するディスカッションメモ